

Hiukkavaara School 訪問

麻布中学校・高等学校 中学1年学年主任 濱田 博之

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2025年9月9日、視察先であるヒウッカヴァーラ学校を訪問した。学校があるヒウッカヴァーラ地区はオウル市中心部からおよそ4km東にある森林地帯を切り開いて造成された新しい地区で、オウル市街の拡張地域として計画的な開発がなされている。将来的には北極圏スマートシティ(Arctic Smart City)として、2万人の新規住民に向けた省エネルギー性能など持続可能性に優れた住宅が整備される予定である。

2 学校概要

ヒウッカヴァーラ学校は、地域の住民に提供される公共サービスの中心となる、コミュニティセンターの中核施設に位置づけられる。コミュニティセンターは小学校・中学校に相当するヒウッカヴァーラ学校の他、保育所に相当するデイケアセンター、青少年センター、図書館などを含む複合的な施設となっており、相互に連携したサービスが提供されている。



ヒウッカヴァーラ学校

2017年創立の新しい学校で、現在でこそ住宅地の中に立地しているが、設立当時は周りを森林に囲まれていたという。中学校は1年生から3年生まで現在1,060名が在籍しており、周辺の開発にあわせて増加する傾向にある。教員は校長と2名の副校長、担任教員40名、教科担当教員25名、特別支援教員13名、補助員22名などから構成される。教員の採用については校長および副校長に裁量があり、公立学校ではあるが日本と異なり他校への異動などはない。また校長と副校長も設立当初から学校運営に携わっており、一貫した構想のもとに方向性が定められている。

3 教育環境

(1) コ・ティーチング

同校の視察のなかでもっとも特徴的であると感じられたのは、複数名の教員が同時に授業を受け持つコ・ティーチング(Co-teaching)であった。1人の教員が受け持つクラスは20人程度の生徒からなり、多い場合でも25人は超えないように設定されている。これらのクラスを単独で開講することもあるが、2クラスを合併して開講し2名の教員で受け持つことが広く行われている。低学年など場合によっ

てはここに授業アシスタントが加わる。これにより主に授業を担当する教員と個別の生徒に目を向ける教員とが同時に教室にいることとなり、きめ細かい指導が可能となる。日本ではインクルーシブ教育実践の取り組みとしてコ・ティーチングが紹介される場面を多く目にすると、日常的な教科教育の場においても広く取り入れられている点は特徴的といえる。

教員同士での連携の必要性も増すことから、日常的にコミュニケーションを図ることとなる。これにより授業の振り返りや教材開発の面でも多様な視点からの検討が可能となり、教育の質の向上に繋げることができると考えられる。また複数の目で生徒を見守るということで、教員の精神的な負担も大幅に軽減できるという。時間割の問題などもあり、共同で授業を設計するには多くの時間を要するなど負担は大きいが、長期的にみれば効率的になると考えられている。前述の通り教員の採用にあたっては校長・副校長の裁量が大きく、それにあたってコ・ティーチングが可能な人材かという点を重視しているとのことだった。学識や授業をする力があることは前提として、学校の方針への共感があること、同僚との協調性があることも重視しているということであろう。

コ・ティーチングを柱に据えていることから、教室の構造もそれに適したものとして設計されている。生徒が所属する教室は 20 人ほどの座れる小さな教室だが、隣教室との仕切りを取り払うことでコ・ティーチングを行うことのできる教室としても利用できる。また化学の実験に使う教室も基本は 20 人ほどの生徒向けに作られているが、2 つの化学実験室の間は 40 人ほどが受講できる座学用の教室で結ばれている。これにより理論部分や手順の確認など座学を 2 クラス合併のコ・ティーチングで、実験は少人数で実施することができる。それぞれの授業スタイルにあわせた最適な形態を求めた校舎の設計といえる。



通常教室



化学実験室

(2) 校舎などの設備

木の温もりが感じられる外観が特徴的な同校の校舎だが、その中には様々な考え方に基づいた構造を見ることができる。学校の入り口を入ると、まず出迎えてくれるのが吹き抜けの天井を持つ広いカフェテリアである。この広大な空間を中心と

して、普通教室の他、校内には多様な大きさの部屋が存在する。これは学びの巣¹（Nests of learning）とよばれる取り組みで、全体としては140～230名の利用を念頭に置いた空間だが、グループのためのミーティングスペースや、小規模で柔軟な学習スペース、落ち着ける場所などから構成されている。様々な規模の空間が配置されているのは、学習は必ずしも教室でなされるものとは限らず、その科目に応じて最適な空間で行われるものとの考え方によるという。授業を見学した際も、グループごとに調べ学習をするにあたって必ずしも教室に残っている生徒は多くなく、大半が教室を出て自分たちが適当と判断する場所で課題に取り組んでいる様子がうかがえた。

また、廊下やホールにはテーブルや椅子が置かれ、ちょっととしたミーティングを行うこともできるようになっているほか、高い背もたれに囲まれたベンチなどもあり、他者からの視線を遮ることもできるようになっていた。同じ教室に居続けることを負担に感じたときに、息抜きに移動できる先があることは生徒にとっても救いとなる。

こうした画一的ではない多様な居場所は生徒の精神的な負担を軽減することに一役買い、教育効果を高めているものと考えられる。



食堂



廊下にあるベンチ

4 おわりに

コ・ティーチングに適した教員やスタッフの配置、校舎の設計などが可能となっている背景には、校長以下、学校のトップが構想段階から一貫して運営に携わっていることがある。また学びの巣といった取り組みも同様で、後から既存の学校施設に取り込むことは難しい。

オウル市には私立学校がほとんどなく、公立学校が大半を占めているが、それは均質な



副校長との集合写真

¹ 様々なスケールの学習スペースが組み合わされていることから「学びの入れ子」といった意味合いを含んでいるとも考えられるが定訳はない。

教育の場しかないことを意味してはいない。それぞれの学校が一貫した方針のもとに独自の教育のスタイルを模索していることは、日本の公立学校とは大きく違う点といえるだろう。フィンランドの教育システムについて事前に学習した際に、私立学校がほとんどない点について疑問に思い、画一的な教育が行われているのかといらぬ心配をしたが、まさに杞憂であった。校長らの強い理念が新たな学校を生み出し、共感する多くの教員も欠かすことのできない存在として互いに影響し合うことで、先進的な学校教育の取り組みがなされていることを実感した。